

# 痔エンド？ (上)

## ——ぼくの闘「痔」6日間

西川伸一  
Nishikawa Shin'ichi

### はじめに 痔のメカニズム

遠いリビアでカダフィが最後の悪あがきをして、多数の尊い人命が失われていく。わたしはその蛮行を、病院のベッドの上でただ漫然とみつめるほかなかった。ことしの二月十八日(金)から二三日(水)まで、わたしは東京・千歳烏山にある肛門科クリニックに入院し手術を受け

たのだ。病名は内痔核の脱肛、要するにいぼ痔である。

なにを隠そう、わたしは長年痔に苦しんでいた。はじめてパソコンを買ったとき、操作に慣れようと日誌をつけた。それは一九九五年五月一日からはじまっている。「痔」で検索をかけると、「痔病が心配になり、四時のバスで、プールへ。水に浮くと気持ちがいい」という一九九六年七月二九日の記述がまずヒットした。同年末の父親の葬儀でもきちんと座れず、口の悪い親戚から「大痔主」と冷やかされたのを覚えている。症状が出たのはもつと前から、診察券を調べたら一九九四年一月六日に、はじめて痔の診察を受けていたことがわかった。

痔は血行障害の一種である。心臓から押し出された血液は、大動脈→動脈→細動脈→毛細血管→細静脈→静脈→大静脈を経て心臓に戻ってくる。そして、静脈の環流障害により、静脈内に血液がたまった状態をうっ血という。肛門付近には静脈叢とよばれる静脈血管が集中している部分がある。痔核とはこの部分がうっ血し、血管の一つ一つがふくらんで盛り上がった状態のことである。肛門と直腸をつなぐ歯状線より上の直腸部分にできたものを内痔核、それより下の肛門部分にできたものを外痔核とよぶ。そして、脱肛とは内痔核が大きくなって、肛門の外に脱出した状態を指す。

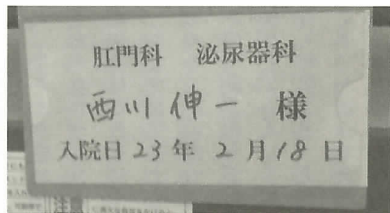
他の動物と異なり、人間は二足歩行である。当然、肛門は心臓より下にある。肛門付近の静脈叢から血液を心臓に戻そうにも、重力が働くのでそこはうっ血しやすい。しかも、ふつう静脈には環流する血液の逆流を防ぐための弁があるが、ここには弁がない。二重の意味で、肛門付近の静脈叢はうっ血しやすいのである。痔の予防のために、シャワーですませず入浴しなさいとよくいわれるのは、血行を活発にしてうっ血を防ぐためだ。

以上のことをわたしは、ベッドの上で痔に関するHPをネットサーフィンして学んだ。さて、前置きはこれくらいにして、一五年以上悪あがきしてきた大痔主が元痔主に「転向」するてんまつに話を進めよう。

### 二月十八日(金)入院初日

入院の日。午後二時に来院するようにとのことであった。事前に渡された「入院の方のご案内」には、入院当日もおかゆ、具の入っていないかけそば・かけうどん、ロールパンは食べやすいとあった。朝食にロールパン二個を口の中に押し込んだが、昼食は食べる気にならずにパスした。

余裕をみて少し早めの一時間前に家を出た。電車の中で本を開くが、活字が頭に入っていない。京王線の千歳烏山駅に一時半すぎに到着。北へ



枕元に掲げられたわたしの院内「名刺」。退院時に記念に持ち帰った。入院の日に撮影。

に荷物を置いて、二人で四階へあがる。ここに食堂があり、自動販売機とコインランドリーも備えられている。見晴らしがいい。再び三階の病室まで彼女といっしょにきて、短い院内ツアーは終了となった。

向かって歩く。途中の甲州街道を横断するところで長い信号待ち。天気はいいが風が強く寒い。気持ちを暗くさせる。これを渡るとまもなく入院するクリニックだ。二時一〇分前に着いた。さっそく入院手続き。その際、ガーゼ巻きコップ一五枚入りワンパックを実費で購入することになってる。こんなにくさんのガーゼはなぜいるのか、また、どういうふうに使おうか。

受付の人が院内を案内してくれる。四階建て

の三階にわたしの病室はあった。せっかく生命保険から支払われるのだからと、わたしは個室を奮発したのである。これがあとで大正解だったことがわかる。ビジネスホテルのシングルルームのような間取りになっている。ユニットバスのトイレはもちろんウォッシュレット。自室内に荷物を置いて、二人で四階へあがる。ここに食堂があり、自動販売機とコインランドリーも備えられている。見晴らしがいい。再び三階の病室まで彼女といっしょにきて、短い院内ツアーは終了となった。

まもなくすると看護師のTさんが来室。そこで五分ほど今後の治療予定の説明を受ける。きょうはこれから一時間半ほどかけて、二リットルある腸管洗浄剤を飲むように。これは飲んで一時間足らずで、腸内の固形物が排泄される。透明の液体が排泄される。これで腸の洗浄は完了する。腸内に便が残っていると手術ができないのだ。

手術はあす午前九時ぐらいからとのこと。あすは終日絶食となる。手術では腰椎麻酔で下半身を麻痺させるので、手術開始後八時間はベッドから降りてはいけない。その時間が過ぎて最初にトイレに立つときは、必ず看護師をよんでその付き添いのもとでいくようにいわれる。麻酔が残っていて転倒する恐れがあるからだ。手術の現実感に押しつぶされそうになる。Tさんが出て行ったあと、しばらく部屋でぼーとする。このTさんには退院までずっとお世話になることになる。

腸の洗浄がすんで、五時半に一階の診察室によばれる。担当医のM先生から診察と手術開始時刻の確認があった。背中に麻酔を打つので、背中をよく洗っておくようにとも。

六時に食堂で夕食。ここで入院患者全員がわかる(当日手術の人以外)。男女それぞれ五人ずつぐらい。男女別々のテーブルで食べることに決められている。さすが肛門科の専門医院で、食堂のいすには肛門に負担がかからないドーナツ状の円ざぶとんが置かれていた。翌日が手術の患者はトーストとスープだけ。前から入院している患者たちが、「おしっこが出にくい」「お通じが固くならなくて退院の日がはつきりしない」などと話している。食べながらよくそんな話ができるものだ。とても会話に加われず、気分が沈み込む。

ところで、傑作映画「ショーシャンクの空に」(アメリカ、一九九四)には、ショーシャンク刑務所ではじめての夜を過ごす囚人たちが古参連中から「FST(新入り)」とからかわれるシーンがある。痔の「ムシヨ」に入所した自分も「FST」の洗礼を受けたのだ。あつという間に食べ終わって、「失礼します」と蚊の鳴くような声であいさつして帰室。そういえば、八〇歳前後にみえたあのお年寄りの患者は、元最高裁判事の藤田宙靖にちよつと似ていたなあ。

### 二月一九日(土) 手術日

七時にTさんが来室し、検温と血圧・脈拍測定、そして点滴。八時半に洗腸。黒いタイツを脚にはかせられる。手術の呼び出しを待つ。九時半すぎにTさんの案内で二階の手術室へ。病衣をはずしパンツも脱いで手術台の上に腰を下ろすよう促される。黒いタイツだけはいっている

という妙な格好で、恥ずかしくしていたたまれない。Tさんが脱いだ病衣を肩にかけて、急所は毛布で隠してくれた。かごにおむつがみえる。手術後はこれをはくことになるのだ。

やがてM先生ともう一人の医師が無言で入ってくる。あいさつぐらいしてくれ！こちらは不安で胸が張り裂けそうなのだ。黙々と二名の医師とTさんは手術の準備を進めている。この待ち時間こそ、入院期間を通じてもっとも恐怖を感じた数分であった。ようやく病衣がはずされ、M先生が入念に背中を消毒している。そして背中に腰椎麻酔の注射が入る。あまり痛くない。次第に尻のあたりが温かくなってくる。次に毛布もはずされて、手術台にうつぶせに寝るよう指示される。股を開かされて手術が始まる。

わたしが受けた手術は、PPH (Procedure for Prolapse and Hemorrhoids) 法とよばれるものである。一九九三年にイタリアで開発された。それまでは痔核根治手術といって、はさみを使って痔核を切除・縫合していた。これに対して、PPHは自動縫合器を用いた内痔核手術で、従来の手術法より術後の痛みが少なく、入院日数も短くてすむ。痔核を切除するのではなく、直腸の粘膜の一部を切り取り、そのスペースを利用して、たれ下がっている痔核の粘膜を引っ張り上げるのである。

これが肛門から挿入される。麻酔が効いてい



PPHで用いられる自動縫合器

うが長かった。切除した直腸の粘膜をみせられる。白い粘膜に血液が付着している。父親の股に侵されたすごい食道と胃をみたことがあるので、それほど驚かない。

肛門の下にガーゼが貼られ、さらに紙おむつをはかせられ、手術台のまま自室へ。ベッドに移される。麻酔が効いているあいだは楽で、自宅にいた長女に枕元の携帯電話から無事終了を伝える。やがて麻酔が切れて、痛みが襲ってくる。髪の毛をかきむしる。痛み止めを点滴してもらって、少しずつ収まる。

午後五時四〇分。手術開始から八時間が経ち、ベッドからも降りていいことになる。さっそくナースコールしてはじめてトイレに立つ。その際、Tさんから座ってするようにいわれる。なぜだろう。いざ便座にすわると、尿意はある

のだが尿がなかなか出ない。時間がかかるから座るようにいったのだと合点した。結局、用が足せないまま、ベッドに戻るほかなかった。麻酔の影響なのである。

六時半ごろM先生が来室。下腹部のつっぱり感がないことをチェックし、肛門のちくちくする痛みは次第におさまると説明される。器械を挿入するとき肛門の血管を傷つけてしまうのが原因という。便が出た場合は紙で拭かず、ウォッシュレットで洗い流してタオルで軽くふくように念押しされる。ああ、うまいコーヒーが飲みたい。

肛門の下に貼られたガーゼが血でよごれ、おむつにまで血がしみ出る。ウォッシュレットで肛門を洗い流すと、拭いたタオルに血がついていた。ガーゼを捨てて、入院時に買ったガーゼ巻きコットンを折りたたんで、肛門にあたるように尻の間に挟み込む。こうして、肛門からの出血やガスといっしょに出される便のカスを受けるのである。ようやくガーゼ巻きコットンの必要性をのみこむ。

尿がたまって気持ちが悪くてたまらない。トイレで尿を出すために全神経を集中させる。二〇分くらいしてようやく出る。やった！とこぶしを握りしめる。こんなにうれしいとは。九時前に検温と血圧・脈拍測定。じきに寝入ってしまう。

## 二月二〇日(日) 便をもらす

五時過ぎにTさんが様子をみにきてくれる。宿直だったのかな。ありがたいことだ。七時半に検温と血圧・脈拍測定。八時に化膿止め点滴。九時に朝食。もうなにを食べてもいいのという。量も他の患者と変わらない。ひさしぶりに歯を使った感じ。すべて食べられた。一昨日便が固くならないと嘆いていた患者さんは、きょう午前中に退院することになったそうだ。「大痔主から元痔主になりました」と明るい。早く自分もそうになりたい。

部屋に帰って急に便意に襲われる。トイレまでほんの数歩がまんしようとするが、肛門をしめる力が入らない。おむつの中にペースト状の便をもらしてしまふ。ナースコールでおむつのかえをもらう。便失禁とはなんともみじめである。それでも排便時にほとんど痛みがないのは救いだ。前述の痔核根治手術だと相当の痛みを伴うという。

気分を変えようと、四階の食堂横のコインランドリーで洗濯する。待っている間、久しぶりに新聞を読む。ここにその日の毎日新聞が届けられるのだ。なんだか気分が晴れてくる。この日以降、朝食後の排便が無事に済むと四階にあって、自販機で買った缶コーヒーを飲みながら、食堂で朝刊をゆっくりめくるのがささやか

な楽しみになった。

帰宅すると痛み止めが切れたのか、肛門が痛み出す。ガーゼには血と便の色がしみ出ている。取り替えなければ。そうこうするうちに、一時の昼食の時刻に。メニューは湯麺だった。例の藤田宙靖似のおじいさんが、手術前はトイレで三〇分いさんでもこんな細い便しか出なかったと、はしで麺を一本もちあげて話しはじめ。かんべんしてくれ。

食後はベッドの上でごろごろする。携帯電話でネットをチェックすることぐらいしかできない。どうせならと痔やPPHのページを見まくる。痛みと尿のでないつらさは相変わらず。また液状の便をもらす。ガスではないかと油断してしまつた。便だと認識して五秒でかけこまないと間に合わない。個室を奮発してよかつた。ナースコールすると男性が応答。あれ男性看護師もいるのかな。と思つたら、M先生みずから紙おむつを届けにきてくださり恐縮至極。

五時に検温と血圧・脈拍測定。Tさんに、便をもらすのは肛門がまだ新しい環境に順応していないからだと思つてもらふ。けつこう太い器械を入れたのだから、出血が続くのも仕方ないのだそう。五時半に診察。もうきょうから入浴可。肛門の感覚を取り戻すためにもそのほうがいいとのこと。退院は水曜か木曜ときき安心する。木曜日の夜にどうしてもはずせない用

事がある。

六時に夕食。自分が入院した日と同じメニューが二人分出ている。あす手術の患者が二人入ったのだ。やがてその二人が現れる。一人はまったく無言でパンを食べていたが、もう一人はけつこう社交的な人で、痔瘻ろうの手術をあす受けるといふ。「まったく痛くないし短時間で終わりますよ」と先輩面していつている自分がおかしい。おととい手術だったのでわたしとは初対面になる六〇代ぐらいの患者さんが「おしっこが出なくて困る」とぼやく。自分も同じだ。

部屋に戻って風呂を入れる。入浴したとたん便意を感じて、半分は湯船に。お湯をはり直す根気がわかない。ええいめんどうだとこのままつかる。血行がよくなるのがわかる。排泄が意のままにならずなんとも無様この上ない。

(この項つづく)  
(にしかわ・しんいち／明治大学教授)

### 早川由美子監督 「さようならUR」

(旧住宅公団) が  
中国・雲南省昆明で  
3月25日 上映会に参加  
映画祭 YUNFEST 2011

本誌編集委員の早川由美子監督が製作した映画が中国の映画祭に参加する。  
UR (旧住宅公団) 管理の高幡台団地73号棟(東京・日野市)の取り壊しはなぜ起きたのか。その背後にある削減方針を暴く。